

『考える子ども』一九六〇年十一月（社会科の初志をつらぬく会）

歴史教育雑感

矢口 新

日本の教師は、歴史の教育について、妙な偏見をもっているように思われる。時代観念とか、歴史の流れとか、通史などという言葉を使うとき、それが出るようである。そして、それは、戦争前の歴史の教育がそれをつくりあげているようである。考えてみると恐ろしいことである。がそれを論ずる前に、例をあげて、歴史の理解のむずかしさを考えてみよう。

次の文は、或る小学校六年用教科書の叙述の一部である。いわば記述された歴史である、記事としての歴史である。記事としての歴史が成立つ前提に、事実としての歴史があることは、誰もよく知っていることであろう。それはともかく、次の文章は、その記事としての歴史の中の、鎌倉末期から建武中興の時期のことを叙述した所である。所々をあげてみる。

「北条時宗は武士をはげまして、これをふせぎました。朝廷は、敵をうちはらうことが出来るように、神社や寺院にいのりをささげました。（中略）しかしこの戦いのため、幕府は多くの費用を使い、しだいにその力は弱まっていきました。」

「承久の変ののち、北条氏は天皇のあとつぎのことに口をいれて、朝廷をおさえました。しかし朝廷には、幕府をたおして政治をとりもどそうとする考えの人々がいました。蒙古との戦いののち北条氏の政治がみだれたので、後醍醐天皇は、承久の変以来の願をなしとげようとはかりました。」

これらの記述を理解することは実にむづかしいことだ。たとえば、時宗が武士をはげましたというのを子供はどう理解するだろうか。ただ言葉の通りにはげましたと理解するだけだろうか、朝廷がいのりをささげたということについてはどうであろう。それも言葉の上にあらわれたことだけを理解する程度であろうか、その次のこの戦いのために幕府が多くの費用を使って、しだいに力が弱まってきたことを、どの程度理解出来るか、幕府が費用を使ったということをどのように理解し、それがもたくなって、力が弱まったということをどのように考えるだろうか。幕府の力が弱くなるというのはどういうことか、その具体的なことがどこまで理解出来るか。

その次の一節については、或はもつとむづかしい問題がありそうである。北条氏が天皇のあとつぎのことに口を入れるということがどういうことを意味するか、それが朝廷をおさえることになったというのは、何故なのか、朝廷に幕府をたおそうという考えの人々がいたというのはどういうことか、承久の変以来それがあつたというようなことはどうしてなのか、後醍醐天皇が承久の変以来の願をなしとげようとはかつたということはどう理解するか、長い間そういう考がつつぎ、それを天皇がその時期に計画したというが、討幕を計画するということが具体的にどういうことなのか、二、三人のいたずらの相談ではないのだから、それがどこまでわかるか。

こう考えると、歴史がわかるということは大変なことであることがわかる。これは書かれた歴史についての理解のことをいっているのであるが、それが事実としての歴史をとらえるなどということになったら、如何に大変かということ、言うまでもない。歴史は十三、四才からわかり出すといわれているが、上のようなことを考えると、もつともだと思ふ。十三、四才からやつとわかり出すのであつて、大人でもわからない人々も多いのではないか。歴史は決して、講談ではないのである。しかし講談的要素もないではないが。

次の文章は、戦国の時代における所である。

「戦国時代が続いているうちに、力の強い大名は、天皇をいただき、全国を統一しようと考えようになりました。(中略)信長は、全国を統一しないうちに殺され、けらいの豊臣秀吉がこれをなしとげました。秀吉は、大阪に城を築きやがて全国を統一し、朝廷から高い地位をあたえられました、統一のしごとをすすめるあいだに、檢地をおこない、云々。(下略)」

「秀吉が死ぬと問もなく、徳川家康は関原の戦いで豊臣がたをうちやぶり、一六〇三年將軍となり、朝廷から政治をまかせられて、江戸に幕府を開きました。」

これは前の記述とは時代がちがう頃の記述である。ここでも、全国を統一しようということは、どういうことか、具体的にわかるだろうか。鎌倉時代の統一とは全くその中味がちがうのであるか、そういう時代のちがいがわかる程よく理解出来るだろうか。信長のけらいの秀吉が、信長のあとをついだということがあるが、このけらいというのは北条時宗の時代のけらいとは、意味がちがうというようなことがわかるだろうか。秀吉が死ぬとその後は家康が豊臣がたをうちやぶつて

將軍となり、幕府をひらいたとあるが、この幕府は、北条の幕府とは、その中味がずいぶんちがう。それをつくっている社会関係が全くちがう、人々の心もちがう。それは形だけのことでない。つまり構造がちがう。それが結局時代のちがいということであろうが。そうして、そういうちがいがわかることが、時代觀念があるということであろう。それは断片的事件をとりあげて、その自然時間的前後がわかるということではない。時代ということ、年代的羅列が出来るといふことではない。

記述された歴史の理解のむつかしさを述べたのであるが、このむつかしきは、昔の歴史の教科書ではごまかされていたのである。或はおおいかくされていた。否、自ら目かくしていたのかも知れない。それはともかく、このむつかしきは、事理解へ一歩でも近づこうとするととたんに出て来るものである。その意味では歴史はあらゆる社会科学の総合かも知れない。

それはともかく、歴史の事実の方向へ向つて、理解を進めるといふことは、大変な仕事であつて、小中学校にあつては極めて至難のことに属することを改めて確認しなければならぬ、同時に、論理的には、その事実の理解の上に立つて、所謂時代觀念とか歴史意識とかいわれることも形成されるのであつて、そこに本体的な歴史教育のむつかしさがあるのである。残念ながら今の大人が、そういう歴史の事実の理解については極めて貧困なものしかもっていない。それがこの歴史的事実の理解の問題を抜きにして、一挙に時代觀念とか、歴史意識とかを問題にするという誤りを犯しているのである。

或いはまた多くの歴史学者が歴史教育を論ずる際、歴史の理解のむつかしき、その教育のむつかしきをぬきにして、歴史の史觀の問題に

ばかり入るのも、それと関連がある。歴史教育の問題のまず第一は、歴史教育観の問題からはじめなければならぬのに、歴史観ばかりがとりあげられている。歴史の事実の理解ということ、従ってその教育ということが日本では殆んど考えられていない。そこから出発し直す必要があると思う。

二

歴史という教科については、過去においてさまざまな教育的役割が課せられていた。現在においてもまた同様である。そして、それは、上に述べた歴史の事実を理解するという本質的なものから考えられたことは極めて少ない。それとの関連は多少は考えられたかも知れないが、根本的にどういふ関係があつて、どう位置づくかが厳密に考えられてはいなかつたのである。そしてそれは、日本における歴史科学の発達とも深い関係がある。また教育観とも深いつながりがある。今その細かい点にふれるいとまはないが、その点についてここで考察しておく必要がある。

昔から歴史は暗記物といわれた。これは単的に、日本の歴史教育を表現している。暗記は機械的であつて、理解することとは関係がない。例えば或る歴史的条件があるとすると、暗記することは、その名称である、その年代である。その事件の経過にしても、どこまでいっても名目たることを出ない。名義、名称の連続である。それを暗記して読書百遍というのが昔の歴史教科だったのである。この教育は古い歴史観と、古い教育観の混血児である。読書百遍して意自ら通ずるといふことであるが、意通ずるかどうかはともかく、それによつて思いこまされてしまうということが結果としては成立したのである。そこには科

学的ならざる教育観がある。また特にヒューマニスティックならざるものがある。そういう名目論を思いこませること、そこに歴史を教えることの意味をおいていたというのは、今から考えると面白いことである。それは、儒教的注人主義の教育的考え方であろう。しかし昔の武士の如きはみなこの種の教育をうけていたのである。そこから、確固たる信念をもつて来た。少くともそう考えられていた。

こういう考え方は、歴史の学問についての考え方と根底はおなじである。儒教の歴史観、或はもつと具体的には、大日本史の歴史観はその根底の考え方において、同一の世界観、人間観の上に立っている。歴史を見る上に動かすべからざる固定した観念がある。道德史観である。その歴史の記述には、人間ならざる偶像としての聖人君子がいる。或はおかれている。それが歴史記述の際の最低規準であつて、それによつて、あらゆるものを切りすてる。人間の人間性は問題にならない。まあ極端に云えばこうである。それはやはり名目論としての歴史を生み出して来る。明治後期以後の歴史は、天皇中心の立場でこのような歴史が、教科としての歴史であつた。歴史の科学的研究はまだ十分に育っていない。いくつかの新しい息吹きはあつたが、教育の中の教科としての歴史を動かす程大きな力ではなかつた。教育は、そういう歴史の叙述を読書百遍させて、確信にまで至らせようという方向に動かざるを得なかつた。そこに奇妙な通史などという観念が生れたのである。

日本の歴史をそのような名目論において読書百遍せしめること、そこに皇国日本人の確信が生れる。つまり愛国心が生れる。だから日本の歴史全体を通じて、天皇の歴史が学ばねばならない。こう考えられなければならなかつたのである。否それが必然的な思考であつた。

絶対王制的明治政府の流れの中の近代日本の歴史教育観はそうあるのが当然といえれば当然であったといえよう。所謂通史が教えられる必然性は日本の歴史全体を通じて、天皇のことが語られなければならないという所にある。歴史の流れとは、まさにその流れなのである。これは本当は歴史ならざるものかも知れない。少くとも永却回帰の歴史に近い。小学校、中学校の教科書に書かれた歴史はそういうものであったといつてよい。そこには、近代的な意味での時代というのは全くあらわれていない。そこには時代のメタモルフオーゼは全く見られない。

しかしこの教育は立派に成功した。それは、現在あらゆる教師が、通史といい、歴史の流れといい、そういう言葉の呪縛に陥っている。歴史教育の思考はすべてそこから出発している。新しい人間観の上に立ち、新しい歴史観を背景にして新しい歴史教育を打ち立てようとしても、そういう呪縛から逃れることが出来ないというのは、これまた歴史の面白さかも知れない。「あらゆる時代は神に通ずる」という有名な言葉がある。近代史学によって、社会科学としての歴史を追究すれば、そういう風に考えられて来るのは必然であろう。それぞれの時代が、つながっていないながらもまた異ったものとして、等しい要因をもちながら全く異ったものとして、いわばメタモルフオーゼをなしつつ次々と新なるものを生み出して行くこと、その認識が、この言葉を発せしめたのであろう。発展という歴史概念も今やこういう地盤で考えられなければならない。そうである。

そういう歴史への追究が、われわれに近代教育の中での、或はこれからの人間教育の中での歴史教育の重要性を強く認識させるのではないか。人間と社会の様々な可能性と限界とが歴史教育によって大きく巨視的につかまれるのであろう。歴史への認識、歴史事実の理解を

教育がとりあげるとしたらそこにこそ基本的な目標がおかるべきだと思ふ。社会科学そのものが、このような歴史への巨大な視野を失つては、成長をとげ得ないであろう。唯物史観もその立場である。

三

問題史とか通史とか、或は問題解決学習的歴史教育とか、いろいろなことがいわれているが、その前に、歴史とその教育について、もう一度巨大な視野から考え直す必要はありはしないか。歴史は本質的に掘り起すものである。そういうことが、子供にどこまで出来るか、それは記述された歴史の理解の問題から考えても大変なことであることが想像出来る。しかし歴史の教育はそれをこえて、事実の歴史へ迫る所に本質があると考えなければならぬ。それは子供にどこまで可能であろうか。

十才位の子供に、太古の歴史を取扱わせるのはよい方法であるといふことがいわれて来た。これはなかなか深い考え方をもっているように思われる。そこには、時代を理解させる更に掘りおこさせるものがあるといわれているようである。それはどのようにして可能であろうか。若し子供がそこで時代を把握するならば、他の時代でも把握出来ないことはないように思っているだろうか。様々な時代を、どのような所から理解し、どこから掘り起して行くかを、従来の歴史の枠の中でなく、新しい巨きな視野から眺めて行く必要がある。それには、明治以降の伝統の枠の中に入っている歴史の教科書に記述された歴史を、子供のものにする努力がなされなければならない。根本的な歴史の書きかえが要求されているかも知れない、しかし更にそれには、事実としての歴史へ、教師がもつと迫らなくてはならない。その

事実の中から子供の歴史が生れるのであろう。「歴史は一つしかない」ということであるのか、様々な歴史が記述されてよいのか、子供が子供として歴史を掘りおこすことは出来るのか、出来ないのか、勿論大人の媒介的努力が必要であろうが、そういう点から問題を展開して見る必要はないだろうか。

問題史的取扱と通史的取扱との対立が問題になること自体が、ナンセンスなのではないか。通史などというあやしげな概念は使わないがよい。問題史的取扱いというけれども、歴史は本質的に問題史である。それは取扱いによって考える問題ではない。歴史は常に書かれて行く所に成り立つ。子供も歴史を書いて行くのである。どういう歴史を書くかは、現在がきめるのである。教育的に云えば、子供の心理と論理がきめるといってよい。今の多くの大人に歴史を書かせてみると、子供以下の者が多い。それは彼等が歴史の教育を本當にうけなかったからである。子供に歴史を書かせるということをやらせなければ、われわれはまた昔のあやまちを犯すことになりはしないか。歴史を書くことを通じて、人間と歴史に対して、巨大な視野をひらくのである。そのことは、教育にとって大切なことである。あらゆる時代に子供の目を向けることがそういう巨大な視野をひらくことになるのであろう。

あらゆる時代は、一つのリングの如きものである。子供はそれをどこから切るか、子供のもっている庖丁に合せて切らなくてはなるまい。それを考えるのがこれからの歴史教育の問題であると思われる。取扱論をやっていたのでは、われわれが逃れなければならない呪縛の中に自らを投げこむようなものである。われわれ大人も、子供の目で新しい教科書を書く努力をすること、そのためには余り指導要領がない方がよいこと、などは、ここまできると、痛切な感想である。教科書で

なくとも、せめて子供の目で書かれた歴史読み物がほしい。それが次々へと子供に新しい歴史を書かせるものになるのではないか。